NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　終章ーside　Avan

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16578474

ダイの大冒険, アバン, ポップ, ダイ, 不死身の長兄

終章その１。アバンの旅の終わり。原作本編へつながる話。原作の台詞はアレンジ。

もうひとつ、ヒュンケル視点の終章が入ります。この物語の本編はそこで終わります。
そのほか、後日談が少々入る予定です。

2021.12.11 ヒュンケルオンリーイベント「不死身の長兄」合わせ

Table of Contents

- あるべき未来に進むために　終章ーside　Avan

あるべき未来に進むために　終章ーside　Avan

終章ーside　Avan　　未来
　ロモスの港町から見る水平線は、陽光にきらきらと輝いており、これから先を生きる若者の行く末を示すかのように、澄み渡っていた。
　海面は穏やかに凪いでおり、春先の過ごしやすい季節であることも相まって、海風も心地よい。
　だが、そのような明るい風景とは不釣り合いな、険しい声が響き渡った。
「じょ、冗談じゃないよ！怪物島なんて！」
　大柄な漁師が、少年を前に、声を荒げていた。
「そこをなんとか・・・。」
　少年は、揉み手をせんばかりの勢いで頭を下げているが、漁師は厳しい表情を浮かべたままだった。
「ダメだ、ダメだ！とても船なんか出せねえよ！帰ってくれ！」
　漁師はそれだけ言うと、少年と、その傍らに立つ男を手で追い払った。
　二人は、仕方がなく、桟橋から歩いて陸へと戻るほかなかった。
　少年は、歩きながら、隣の男を仰ぎ見てぼやいた。
「どーすんですか、先生。これで、５人目ですよ、断られたの。」
「うーん、困りましたねえ。」
　そうは言うものの、男は、本心から困っている様子には見えなかった。
　少年はじっとりとした視線を男に向けた。これでも、この男は少年が師と仰ぐ者だ。
「てか、本当に行くんスか？怪物島。」
「それはもちろん。」
　少年の問いに、明確すぎる肯定が返され、彼は大きくため息をついた。
「じゃあ、先生が交渉してくださいよ！こんな難しい案件、俺には無理です。」

すると、男は、眼鏡の奥の瞳を光らせて、少年に問うた。
「おやあ、あなたは行きたくないんですか？」
「そ、そりゃあ、怪物島なんて聞いたら、誰だって気が進まないじゃないですか。」
「怪物島、といっても、昔とは違いますからね。モンスターだって、むやみに人を襲わないでしょう？」
「そりゃ、俺はそんな、向かってくるようなモンスターって見たことありませんけどね。ほんの１０数年前の魔王軍全盛期には、人間を襲うモンスターだらけだったってぇのは、俺だって知ってますよ。
　怪物島、なんてとこなんですから、そんなモンスターがいたっておかしくないじゃないですか？」
男は、少年の問いには答えなかった。代わりに、師らしく、別のことを説いた。
「気が進まないと思っていると、そもそも交渉事もうまくいきませんよ。交渉も一つの技術と思ったのであなたにお任せしましたが、仕方がない、私がやりますか。」
　弟子に職務放棄され、仕方がないとばかりにアバンは答えた。
「・・・始めからそうしてください・・・。」
　ポップは、げんなりとした声で答えた。

　アバンは、今度はもう一つの桟橋まで歩いていくと、そこにひときわ大きな船を停留させている中年の男に声をかけた。浅黒く日に焼けた肌が、彼が、屈強な漁師であることを物語っていた。
「すみません。組合長さん、ですよね？」
　いつの間にその情報を手に入れたのかとポップが驚きを隠せないでいると、組合長と呼ばれた男は、思ったよりも柔和な表情を浮かべて彼らを見返した。
　彼は、アバンに言葉を返した。
「ああ、あんたか。久しぶりだな。何年ぶりだ？」
「５～６年は来ませんでしたからねえ。」
「もうそんなになるか。」
　ポップは、思った。なんだよ、知り合いがいたのかよ。そう思う

と、彼は、幾分か腹立たしい心持ちになった。
　ポップは知らなかったのだが、ラインリバー大陸南部のこの街は、漁で生計を立てる者が多かった。そのため、漁師たちはギルドを形成していた。ギルドの役割は、他の街の漁師に対抗したり、また、漁を行う海域に争いが生じたときの仲裁に当たるなどであった。
　アバンが声をかけた男は、その漁師ギルドの長だった。
　漁師組合長は、ポップに視線を止めると、アバンに問いかけた。
「前に連れていた子どもとは違う子だな。あれは、あんたが初めてここに来たときだったから・・・１０年以上前か。
あのときは、あんたたちはパプニカに渡ろうとしていたな。」
　その言葉に、一瞬だけ、わずかに、アバンの面が陰ったが、ポップも組合長も気づかなかった。
　アバンは、すぐに、いつも通りの明るい声で答えた。
「この子も弟子なんです。魔法使いの修行をしています。結構、筋はいいんですよ。」
　目の前で師に褒められ、ポップは得意げな気分になった。つい先ほどの腹立ちは、どこかに消えていた。
　しかし、組合長は、その言葉には何の反応も示さず、アバンに問いかけた。
「あんたがわざわざ旧交を温めに来たとは思えんな。何の用だ。」
　すると、アバンは、眼鏡の奥の瞳に狡猾な光を宿らせて組合長に答えた。
「ご名答、さすがですね。
　単刀直入に申し上げます。
　船を出してください。デルムリン島に行きたいんです。」
「無理だ。」
「即答ですか。」
「デルムリン島は、怪物島だ。有象無象のモンスターがいるんだろう？今やおとなしくなったとはいえ、俺も若い頃、モンスターに襲われたことは覚えている。いくら俺でも行く気は起きん。
　第一、あの海域は、モンスターばかりで大した魚がいない。漁にならん。」

「そういわれるとは思っていたんですがね・・・。」
「分かっていたのなら、わざわざ聞くな。」
　一刀両断に申し出を拒否され、アバンは、困ったように頭をかいた。しかし、やはり本気で困っているようには見えない。
　アバンは、再度、組合長に提案をした。
「じゃあ、これでどうですか。
　南方に、あなたたちが補給に使う小島がありますよね？そこまで乗せていってくれませんか。」
　その言葉に、組合長の目が光った。
「・・・どこで聞いたんだ？そのことは、この港から漁に出る人間しか知らないはずだぞ。」
　すると、アバンは、得意げに片目をつぶって答えた。
「情報収集は得意なんです。」
　組合長は苦笑した。
　いつの間にそんなことまで把握していたのだろうか。一緒に行動していたはずなのに、この街に着いてからのアバンの行動を思い返してみても、アバンに漁師組合の情報を収集していたような動きはなく、ポップには心当たりがなかった。
　ポップは、我が師ながら、抜け目ない、食えないなと思った。
「食えない男だ。」
　男は、ポップが思ったことと全く同じ言葉を口にした。
「お褒めいただき、ありがとうございます。」
　そういって、アバンは、いつものように微笑んだ。
　組合長は、ため息をついた。
「・・・わかった。小島までだぞ。」
　その言葉に、アバンは笑顔で礼を述べた。
「ありがとうございます。」
　アバンは、矢継ぎ早に、次の要望を出した。
「それと、小舟も一ついただけませんか。積んでいってもらえると助かります。小島からデルムリン島までの足がないので。」
「あの小島には、非常用の小舟がいくつもある。それを一つ売ってやる。」
「ありがとうございます。

貸す、とは言ってくれないんですね。」
「戻ってこないかもしれない奴に貸す舟はない。」
「うーん。そんな過酷なところに行くつもりじゃないんですけどね・・・。
　でも、売っていただけるのならそれで十分です。
　・・・あ、あまり高くしないでくださいね。」
　アバンは、一通りの交渉を終えると、桟橋を後にした。ポップが彼の背を追いかけ、アバンに問いかけた。
「小島まで、でその先はどうするんですか？」
「私とあなたで漕ぎましょう。」
「ゲッ！マジですか！？」
　あっさりと、大きな課題を示され、ポップは顔を青くした。直ちにアバンに抗議をする。
「俺、操船なんてできませんよ！？」
　すると、アバンは、こともなげに言葉を返した。
「あ、大丈夫です。私が教えます。あとは、バギで推進力をつけます。」
　これ以上何を言っても、アバンが方針を変えないだろうということに気付き、ポップはげんなりとした顔でぼやいた。
「知り合いなんだったら、デルムリン島まで送ってもらうように交渉すればよかったじゃないですか。」
　しかし、このポップの言葉にも、アバンは即答した。
「無理ですよ。この海域の人たちは、あの島を非常に恐れています。」
　すると、その言葉に違和感を覚えたポップは、アバンに問いただした。
「・・・先生、初めから、小島までのつもりだったんですか？」
「もちろん。」
　アバンは、にっこりとほほ笑み、ポップに答えた。
「交渉事というのはですね、ポップ、初めに相手が嫌がりそうな提案をして、よりましな提案のように見せて、こちらの飲んでほしい案を出すんですよ。
　今回も、うまくいったでしょう？」

「・・・先生・・・。」
　ポップは、複雑な笑みを浮かべた。やり場のないいらだちがある一方、素直に感嘆する思いもあった。
　対象的に、アバンはポップに視線を向けて、にこにこと明るい笑みを浮かべていた。
師のそんな笑顔を見ると、ポップの不満が薄れていった。
ーしょうがねえなあ・・・。
　ポップは、大きく息を吐くと、苦笑を振り払い、屈託のない笑みを師に向けた。
「うまくいったんですから、今日はウマイもん食いましょう！
それに、今日はゆっくり寝かせてくださいよ。街ともしばらくおさらばなんですから。
先生のオゴリっすよ。」
　ポップは、この先の名物料理を頭に浮かべながらアバンに話しかけた。
　だが、いつもはすぐに帰ってくるはずの返事がない。
　ポップは、不思議に思って、隣を歩くはずのアバンを見上げた。
「先生？」
　アバンは、ポップの方を向いてはいなかった。右手のポップから視線を外し、左の雑踏に視線を向けたまま、ひどく驚いた顔をしていた。
　アバンは、突然、その方向に向かって走り始めた。
　ポップは、急なアバンの行動に驚き、慌てて師を追いかけた。
「せ、先生！？」
　アバンは、雑踏の中、人をかき分けながら走っていた。
「すみません。」
「失礼します。」
　アバンは、何度も周囲の通行人にぶつかりそうになり、謝りながら、それでも足早に雑踏を駆け抜けようとしていた。
　そして、アバンは、ひときわ大きな声で、前を歩く青年に呼びかけた。
「すみません！」
　その声に驚いて、相手が振り返った。まだ若い、２０代前半くら

いの若者だった。大ぶりの剣を腰に佩いているところからすると、戦士なのだろう。
　だが、彼が振り返ると、アバンは、はっきりとした落胆をその面に浮かべた。そして、先ほどと同じように、謝罪の言葉を口にした。
「す、すみません。知り合いに似ていたもので・・・。」
　若い戦士は、アバンの言葉を不思議そうに聞くと、あいまいに会釈をし、そのまま踵を返して雑踏の中に消えていった。
　ようやく師に追い付いたポップが、荒い息をなだめながら、アバンに尋ねた。
「ど、どうしたんですか、先生？」
「・・・いえ・・・。」
　うつろな言葉を返すアバンは、ポップが見たこともないような、寂し気な色をその面に浮かべていた。
　ポップは、アバンの視線の先を追いかけた。
　アバンが声をかけた、若い戦士の後姿が見える。
　その男性は、この地方には珍しい、銀の髪をしていた。

　その日は、早々に宿に入った。そして、ポップに言われたとおり、この街の名物料理に舌鼓を打った。
　ロモスは、その内陸に深い森を抱えているため、ジビエ料理や川魚が食べられることが多いのだが、この街は港町とあって、海産物のメニューが多かった。
　ポップとアバンは、白身魚のバターローストに、じゃがいもの付け合わせ、チーズを頼み、さらに、ポップは、食後のクレープまで平らげた。この地方のクレープは、厚手に焼いたもので、パンケーキに近い。それを食後に完食したのだから、若さとしか言いようがなかった。
　アバンも、ポップの空になった皿を見て「若いですねえ。」と苦笑していた。
　ポップは魔法使いだが、アバンは、日ごろから彼の肉体面も鍛えるように心がけていた。
　魔法使いは、身体としては、戦士のような丈夫さはない。

また、魔法を効果的に相手にぶつけるためには、ある程度の俊敏さと反射神経が必要だった。
そこで、アバンは、ポップに、相手の攻撃をよけて、かつ、意表をついた魔法の攻撃が加えられるように、ポップの身体面、特に素早さを上げるように訓練をしていた。そのため、ポップは、魔法使いでありながら、武闘家が行うような修行もメニューに加えられていた。
始めは、ポップは、「俺、魔法使いですよ！？」と言って、抵抗を示していたものの、例によって、アバンに理路整然と正され、今ではその修行の必要性は理解していた。
のちに、ポップは、このアバンの修行に大いに感謝することとなる。魔法使いとしては珍しく、身体能力の高かった彼は、彼にしかできない戦い方をしていくのであるが、それはまた別の話である。
アバンに苦笑され、ポップは、幾分か不満げに口を尖らせた。
「先生がいつもハードなことさせるからでしょう。腹減りますって。
あ、でも、ここのメシはうまかったです。ごちそうさまでした。」
「食欲があることはいいことですよ。」
アバンはそう言って、いつものように穏やかに笑った。

アバンは、宿屋の客室で、ランプをともしながら、彼のリュックの中から天鵞絨（びろうど）の小箱を取り出した。
ポップはすでにベッドの上で、大きな寝息を立てながら、眠りに落ちていた。
アバンは、その様子を微笑ましく横目で見ながら、旅荷の中から取り出した小箱をそっと開けた。
その内部には、小さなくぼみが５つあり、それがちょうど、星をかたどっているように見えた。以前は、そのくぼみの４つに、涙型の石が収められていたが、いまは２つしかなかった。
アバンは、そのうちの１つを手に取ると、両手で握り、祈りをささげた。
アバンの脳裏には、一人の少年の姿があった。思い浮かぶ姿は、

別れたときから成長していない。あの頃のままだった。
―ヒュンケル・・・。貴方はどこに・・・。
　アバンは、輝聖石を握りしめ、１０年以上前に分かれた一番弟子を思った。瞳を閉じたアバンの瞼の裏に、闇に浮かぶ星々のように、同じ石の輝きが遠くに感じられた。
　１つは、彼の故郷に。
　もう１つは、このロモスに。
　そして、もう１つ。
　石の輝きは感じられるが、その所在が分からない。見えない壁の向こうで輝いているかのように、遠い気配しか感じられなかった。
　アバンは、ため息をつき、目を開けた。
　アバンは、ヒュンケルとはぐれて以来、同じようにして、何度も、彼に渡した輝聖石の気配からその位置を探ろうとしていた。
　だが、結果はいつも同じだった。
　ヒュンケルに渡した輝聖石の輝きは感じられる。あの石は、ヒュンケルに渡したもので、彼に対応しているのだから、きっと生きているのだろう。それはわかる。
　だが、その位置がわからなかった。
　アバンは、旅をしながらヒュンケルを探し続けていた。
　しかし、その手掛かりすらなく、そのまま１０年以上のときが流れた。
　あまりにも彼の痕跡がないものだから、彼と過ごした２年間の旅は夢だったのではないかと不安になるくらいだった。
　だから、今日のように、少しでもヒュンケルのことを覚えている人と出会えることは、アバンにとっては嬉しいことであった。
　そのたびに、アバンは確信を持つのだった。
　ヒュンケルとともに旅をした日々は確かに存在し、彼はどこかできっと生きているのだと。

　アバンは、漁師組合長から買い取った小舟を海に浮かべると、ポップとともに乗り込んだ。アバンは、意気揚々としているが、ポップは、ありありと不安をその面に浮かべていた。
　アバンは、船上から空を見上げ、機嫌よさげにつぶやいた、

「いい天気ですねえ。」
　対照的に、ポップは、苦虫をかみつぶしたような顔をしている。
「・・・先生、天気よすぎて、すっかり凪いでます。これじゃあ、船、動きませんよ。」
　アバンが買い取った小舟には、オールのほか、帆のついた小さな帆船であり、帆は、折りたためるようになっていた。基本的に、風を受けて進む船だ。
　いま、この小舟の帆は掲げられていたが、風のないこの日は、帆布がいくらか揺れるくらいで、まったく舟が動く気配はなかった。
「まさか、怪物島まで、オール漕いでいくつもりじゃないですよね！？無理っスよ？」
　アバンなら、肯定で返してもおかしくないと思ったポップは、必死の形相で訴えた。さすがのアバンも、これには苦笑した。
「まさか。いくらなんでも、一昼夜もあなたにオール漕がせるつもりはないですよ。」
「じゃあ、どうするんです？」
「こうするんですよ。」
　そういうと、アバンは、眼鏡の奥の瞳を細めて、意味ありげな笑みを浮かべた。
　ポップは、嫌な予感がした。こういう笑みを浮かべたときのアバンは、ろくなことを言わない、ということは、ここ１年の彼との旅の中で熟知していた。
　アバンは、バランスを取りながら、船の後方に移動をした。
　そして、ポップに背を向けて立つと、彼に呼びかけた。
「ポップ、しっかり捕まっててくださいよ！」
「へ？」
「バギクロス！」
　アバンは、小舟の後方に向かって、真空呪文を放った。それも最上位の呪文だ。
　アバンの放ったバギクロスは、小島の海面すれすれの岸壁に当たり、そのままの勢いで反射した。
　風が巻き起こる。
「さあ、行きますよ！」

「うわあああああっ！！」
　強風が帆にぶつけられ、船が押し出される。
　アバンの起こした呪力の風を受け、高速船のように小舟が海面を滑っていった。
　ポップは、その船体から振り落とされないように、懸命にしがみついていた。

　アバンによる、バギからの推進力と、オールでの手漕ぎを繰り返し、アバンとポップの乗った小舟は、ようやく、デルムリン島の見えるところまでたどり着いていた。
　小さな島だと聞いてはいたが、近づくと、島影が、覆いかぶさるように迫ってくる。ポップは、モンスターばかりの住む怪物島だとの二つ名を思い出し、息をのんだ。
「な、なんだか、不気味なところですね、先生・・・。」
　アバンは、それには答えず、空を見上げた。
「天気が悪くなってきたようですね。海が荒れそうです。帆をたたみましょう。」
　確かに空が暗くなり、黒い雲が空を覆い始めていた。白い雲の向こうから、真っ黒な雲が、重たげに、空にのしかかってきていた。
　アバンは、手早く帆を降ろし、マストをたたんだ。
　ポップも、アバンにならって空を見上げた。心の中にも魔で、暗雲が入り込んできそうな、曇天だった。
「・・・天気、悪くなってますよね・・・。」
「天気だけじゃなさそうですけどね。」
「どういうことですか、先生？」
「ポップ、あなたも魔法使いだからわかるでしょう？奇妙な魔力を感じませんか？」
「・・・魔力・・・？」
「とにかく急ぎましょう。何か起きてからでは遅いですからね。」
「何かって・・・先生？」
　だが、アバンは、それ以上詳細を語ろうとはしなかった。ただ、厳しい眼差しのまま、眼前に迫ったデルムリン島を見つめていた。

デルムリン島の砂浜では、すでにひと騒ぎが起きていた。
　森の中や、空の上、海岸沿いのあちこちから、モンスターたちの絶叫が響いていた。
　錯乱した様子のモンスターたちが、あちこちで、同士討ちを始めているのだ。その地獄絵さながらの様子が、海上からでも見て取れた。
　その惨状は、まさにアバン自身が目の当たりにした１５年前を彷彿とさせるものだった。
　ポップが、上ずった声をあげた。
「な・・・なんスか・・・これ・・・。
　こんな、モンスター同士が争うなんて・・・。」
　ポップも、こんな光景は初めて見たのだろう。
　１５年前に魔王ハドラーが倒れて以来、モンスターたちは、次第に落ち着いてきていた。人と接触することは乏しくなり、野生動物と同様、森の中や山の奥に暮らし、人間や他の動物を不必要に襲うこともなくなっていたのだ。
　それなのに。
　この光景の原因は何か。
アバンは、わかりすぎるくらいよくわかっていた。
　この島は、モンスターが多く、また、魔界にも近いのだろう。
　最も魔王の影響を受けやすい島だ、ということは、あの１５年前の戦いを経験していたアバンには、よくわかっていた。
　アバンは、きつく唇を噛んだ。
　そのアバンに、ポップがすがった。
「せ、先生！？やっぱり怪物島ですよ！帰りましょう！」
「いやだっ！！逃げるなんて！」
　ポップの声に、少年の叫びが重なった。
　驚いたポップは、声の方向に顔を向けた。
　アバンも、同時に振り返った。
　そこにいたのは、一人の少年だった。
　ポップよりも幼い、黒髪の少年。
　その少年は、どこにでもいそうな、小柄な体躯と、おさまりの悪い黒髪をしていたが、ただ、その眼差しは、誰よりも真摯であり、

澄み渡っていた。
　少年は、目の前に立つ鬼面道士に向かって訴えかけた。
「俺だけ逃げてどうなるんだよ！この島のみんなはどうなるんだ！じいちゃんだって！！」
「わがままを言うな！わしだって、いつまで、意識を持たせられるか分からんのだぞ！」
「この島のみんなは、俺の友達だ・・・家族なんだ！そのみんなが、こんなおかしな状態になってて、俺だけ逃げるなんて絶対に嫌だ！
　じいちゃん、きっと何か、方法がある！みんなを助ける手段があるはずなんだ！」
　そう言って、少年は、鬼面道士を振り切り、海岸から森に向かって走った。
　森からは、錯乱したモンスターたちが大挙して押し寄せようとしていた。
　少年は、そのモンスターの群れの前に立ちはだかった。
「みんなっ！しっかしりてくれ！！
　俺たち、仲間じゃないか！」
　アバンは、その小さな背中を瞳に映し、呆然と呟いた。
「・・・あの子が・・・。」
　アバンの脳裏に、パプニカ王の言葉が蘇る。
―余の娘を助けてくれた少年だ。まだ幼いが、話を聞く限り、勇敢で、知恵もある。
　娘は、またその少年に会いたいと言っておったな・・・。
　記憶の中のロモス王が、アバンに語り掛ける。
―その少年は、不思議な子でなぁ。
デルムリン島のモンスターたちが、みな、その子とともに戦い、その子が傷つくとその身を案じて駆け寄るのじゃよ。
あのような子は初めて見たわ。
　アバンは、モンスターの群れを受け止めようと立ちはだかるその小さな背中に、今まで自らがたどってきた彼自身の軌跡を見た。
　アバンは、呟いた。
「・・・なんだ・・・こんなところに、答えはあったんです

ね・・・。」
　真実は、いつも、見えないが、すぐそばにある。
　アバンがかつて語った、彼自身の言葉が、パズルのピースのように組み合わされ、一つの地図が完成した。
—私たちのこの世界は、いま、本来の姿をしていないのではないでしょうか。
—今この世界はどうなっているのか。
　私たちが今後、進んでいくべき未来を知るために、知りたいのです。
—この地上に生きるのは、私たち人間ばかりではない。
　人間と魔族と、モンスターが共に生きていく道がある。
　それこそが、あるべき未来だと、私は信じています。
—もう一度、この世界に新たな秩序を取り戻したいと、思います。
数々のことばが、彼自身の疑問や迷いが、かちりとはまり合い、そして、目の前の少年の姿に重なった。
　アバンは、口角を上げ、笑みを浮かべた。
晴れやかな、笑顔だった。
　アバンは、軽やかに呟いた。
「さて、頑張っちゃいましょうかね。」
　そう言うと、アバンは、小舟を蹴り、砂浜に降り立った。
　アバンは、小さな背中に向かって言葉を投げた。
「いいことを言いますね・・・ダイ君！」
　その声に、少年が驚いて振り返った。
　初めて見るアバンの姿に驚き、戸惑っている様子が見て取れた。
アバンは、笑みを浮かべたまま、ダイに語り掛けた。
「島を出る必要はありませんよ。
　ここは、私に任せてください。」
　そういうと、アバンは、モンスターの群れをかき分け、縞を縦横無尽に走り回り、島全体に破邪呪文をかけた。
大地に描かれた五芒星の魔方陣が空へと上がり、光が降り注ぐ。その光のシャワーが島の闇を、悪意を洗い流した。
　アバンが作り上げた魔法のドームを、島の少年は、驚いた表情のまま、見上げていた。島を覆っていた暗雲は晴れ、雲の隙間から、

天使の梯子のように、陽の光が何本も差していた。
　彼は、ゆっくりと視線を下ろすと、アバンを見つめた。
　まっすぐな、漆黒の瞳が、アバンを射抜く。
　澄んだ目だ。
　アバンは思った。
　破邪呪文を受けて、魔王の魔力が遮断されたモンスターたちは、ダイの周りに集まった。その正気を取り戻した目に、ダイは、満面の笑みを浮かべた。
「みんな・・・！よかった・・・！！」
モンスターたちが、ダイに飛び付き、喜び合っていた。
　アバンは、確信をした。

　この子だ、次の勇者は。
　私がずっと探していた答えを、この子は、自然と掴んでいる。
　この地上に生きる者たちが、等しく手を取り合える世界を、この子はすでに知っている。
　この子は、この世界に新しい秩序をもたらすことができる。
この地上を生きる、人間と魔族とモンスターとが調和する、新しい世界を。
　きっと、この子は、私にはなしえなかった、新たな時代の勇者となる。
　そして・・・きっと、この子なら。
　アバンの目の前で、デルムリン島の光景が、１５年前の地底魔城に重なった。
―私が訪れる前のあの城にも、こんな光景があったんでしょうね・・・。
　モンスターに囲まれた漆黒の少年の上に、銀髪の少年の姿が見えた。
　アバンは、心の中で、一番弟子に語り掛けた。
　この子なら、ヒュンケル、あなたのことも理解できる。受け止められるはずです。
　あなたと同じ、モンスターに囲まれて育ったこの子なら。
そして、ヒュンケル、あなたがこの子に出会い、理解し、支えて

いってくれるのならば。
私たちはきっと、新しい世界を見ることが出来る。

　ダイは、しばらくモンスターたちと喜び合っていたが、再びアバンに目を止めた。
　今度は、少年らしい嬉しそうな笑顔を浮かべて、アバンに礼を述べた。
「ありがとうございます！
　・・・あなたは・・・？」
　アバンは、笑顔のまま、右手を胸の前で折り、丁寧に頭を下げた。
「初めまして、ダイくん。
　私は、勇者の家庭教師です。」
かつての勇者、アバンが巡った、その旅路の果てが、ここにある。
　彼の目指した未来が、デルムリン島の陽光の中、きらきらと輝いていた。

　新たな世界は、少年たちの進む先に、広がっていた。